

『北方諸民族の世界觀』

地理的な距離からいければ、アムール・サハリンに住む人々はわれわれの一番近くに住む隣人である。アイヌ人を別にしても、南サハリンのウイルタ人やニヴフ人などもかつては日本人としての教育を受け、今もその一部は日本国内で生活している。また、アムール川流域に住むナーナイ人やオロチ人、ウデヘ人などの諸民族も、昔から交易を通じて間接的に日本人と交流を行ってきた。そればかりでなく、それらのトゥングースと呼ばれるグループは、言語的、文化的、あるいは形質的にも、われわれ日本人と何らかの関係があると言わ�れ続けてきた人々である。

ところが、その隣人についてわれわれの知識は非常に貧しい。日本の少数民族としてアイヌ人のことを知っている人はいても、ニヴフ人やウイルタ人の存在を知っている日本人はごくわずかであろう。その理由としては、彼らのほとんどがソ連や中華人民共和国といふ共産圏の国々に住んでおり、つい最近にいたるまでロシア語、中国語の文献を通じてしか彼らのことを知ることができなかつたといふことが大きい。

一九九一年のソ連邦崩壊以後は、資金さえあれば彼らの住む地を自由に調査することができた。しかし、この半世紀の間に人々の生活は大きく変貌し、少数民族の伝統的な文化・生活はもはや古老の記憶の片隅にわずかに残されたものでしかなくなつた。したがつてフィールドワークが自由にできる世の中になつても、この分野における文献研究の価値は少しも減じていない。本書は、そのアムール・サハリンの少数民族の文献学的研究を長年にわたつて続けてきた著者が、さらにアイヌの伝承をもその射程に入れて、その相互の連関を探ろうとした労作である。本書の構成は次のようになつてゐる。

第一章 アイヌとアムール・サハリン地域の文化複合について 第二章 アムール・サハリン地域の神話世界——創世神話を中心として	第一部 創世神話 第二章 射日神話 第二章 兄妹始祖神話 第二部 虎、熊、シャチ——「主」の観念と世界観をめぐって 第一章 虎、熊、天神、狩獵神 第二章 シャチと水界の「主」 第三章 双子崇拜と狩獵民の世界観 第三部 アイヌの口承文芸——神譜kamuy yukarの考察 第一章 巫誦とシャマンの歌 第二章 仮面仮装と狩獵儀礼をめぐって 第三章 アイヌの神譜(1)動物説話の類型 第四章 アイヌの神譜(2)神譜成立の可能性 められた大変便利なものである。
--	--

第一部では、アムール・サハリンの諸民族の世界観の根幹に関わる創世神話のうち、複数の太陽が射落されてひとつになったというモチーフを持つ射日神話と、この地上に存在したたつたふたりの人間——兄と妹——が結婚して、人類や民族、氏族の始祖となつたとする兄妹始祖神話が分析されている。ここでは、これまでロシア語でしか読むことのできなかつた数多くのテキストが分類され、和訳で紹介されている。ロシア語の文献が利用できない人々にとっては、この和訳データだけで本書の利用価値は十分にあるが、筆者はこれらのデータを丹念に比較して、興味深い結論を導き出している。

すなわち、射日神話に関しては台湾や朝鮮半島の伝承との関わりをも見据えて、「山東地方を結節点としてアムールランドの文化複合の中には南方諸地域に連なる文化的脈絡を捉えることができそうである」（八八頁）と結論づけており、また兄妹始祖神話に関しては、チュクチ、コリヤーク、ユカギールなどのさらに北方の民族の伝承をも参照して、その中に含まれるいくつかのモチーフの分布域の違いを明らかにしている。

第二部では、「主」という観念についての

神話・伝説を分析している。本章でも数多くのテキストを分類・和訳紹介しながら、これら北方の狩猟民族と共に通する、虎、熊、シャチなどの動物神と、天神、海神との関連、またたつたふたりの人間——兄と妹——が結婚して、人類や民族、氏族の始祖となつたとする兄妹始祖神話が分析されている。ここでは、これまでロシア語でしか読むことのできなかつた数多くのテキストが分類され、和訳で紹介されている。ロシア語の文献が利用できない人々にとっては、この和訳データだけで本書の利用価値は十分にあるが、筆者はこれらのデータを丹念に比較して、興味深い結論を導き出している。

この第一部・第二部においては、アイヌとの関連についてはあまり多く論じられていない。しかし、第三部では一転してアイヌの「神話」が中心に据えられ、まずその成立に関わると考えられている巫謡、そして仮面仮装・狩猟儀礼について、アムール・サハリン諸民族における記述を検証するという新しい視点から、これまでの定説に関する再検討が進められている。

そもそもアイヌの物語文学の起源を巫謡に求めることは金田一京助に始まり、長い間は定説のように扱われていた。しかし、著者はこの第一章で、他の諸民族の事例から巫謡がかなりずしも一人称で語られるものではないことを明らかにし、かつアイヌの巫謡に関するデータには、次資料と見られるものがほとんどのことを指摘して、巫謡についての

立つたことを唱破した。

また、第二章では仮面仮装舞踊劇についても、その上で、北アジアの狩猟民の同類の説話との対比から、これらの類型の起源が女性が狩猟

の諸民族の事例を詳細に例示し、それが北方においてどういう形のものとして伝承されたのかを示した。神話の起源を仮面舞踊劇に求めることは知里真志保に始まるが、アイヌにそのように呼べるようなものが存在したかどうかはまだ不明であり、これまでのところ、それ以上議論が深められないままになっている。その理由のひとつは、北方諸民族の仮面舞踊劇の実態が、アイヌ文化の研究者によく知られていないことにある。著者は自身はアイヌの問題そのものにはあまり踏み込んでいないが、本章で提示された諸民族の資料が、この問題について本格的な議論を始めための基礎資料となることは間違いない。

第三章、第四章では、おもに北海道沙流地方の神話を収録した久保寺逸彦の『アイヌ叙事詩神話・聖伝の研究』（一九七七、岩波書店）を分析することによって、いくつもの推論を引き出している。そのひとつとして、著者は神話の本来の類型が、「動物世界と人間世界の関係をテーマとする神話」に類する、いわば動物神話であったものと推測する。そ

に向けて語ったものであるとしている。そしてそれによって神譜の語り手が女性であること、および神譜が一人称叙述体で語られるとの説明が可能になるとする。

これは、アイヌだけの閉じられた範囲の中で論じられることの多かったこれまでのアイヌ文学の起源論・ジャンル論に一石を投じる、

きわめて大胆かつ刺激的、そして示唆的な議論である。しかし、この章における結論への過程はいささか性急であり、ただちには首肯できない部分がある。

そのひとつとして、アイヌ内の地域差や歴史的変化が無視されている点があげられる。沙流地方を含む北海道西部地域では神譜はカムイカラと呼ばれているが、北海道東部から樺太にかけてのより広い地域ではオイナと呼ばれている。これはただ単なる呼称の地域差という問題ではない。北海道西部ではオイナというのはカムイカラとは区別された、文化英雄を叙述者とする特別なジャンルを指す名称であるが、北海道東部や樺太にはその区別自体がない。そして樺太における神譜（オイナ）には、かならず文化英雄がその中に登場することが要求される。

カムイカラという名称の分布域の狭さや、

それが二次語（合成語）であることを考えれば、神譜というジャンルのアイヌ語名は本来はオイナであったと考えられる。そして文化英雄のことをオイナカムイ「オイナ神」と呼ぶ地域が多いことを考えあわせると、オイナすなわち神譜というのは本来文化英雄にまつわる物語だったという可能性が大きい。

ところが著者自身「本来の類型」と考えられるタイプの】神譜の中には、文化英雄オキクルミやその妹神が登場する例が少なくない」（四〇一頁）と述べているにもかかわらず、起源的考察の中にはその点が考慮されていない。これは、自らが批判の対象とする金田一・知里などの古典的なジャンル論の枠に著者自身がまだとらわれていて、北海道西部型のジャンル区分をすべての出発点としているところに原因が求められる。

このような点で問題を含む部分もあるが、本書の登場によってアムール・サハリンそして北海道という、近くて遠い世界への扉がようやく開かれたことの意味は大きい。日本国内の伝承の研究に携わっている方々にも、決して見過ごすことのできない一冊であることは疑いない。

(1) この点に関しては、中川裕「アイヌ語

語文学ジャンル名の分布と歴史」 言語

学林一九九五—一九九六編集委員会『柴

田武先生喜寿記念論文集 言語学林一九

九五一—一九九六』（一九九六、三省堂）を参照されたい

(なかがわ・ひろし)